

東京農業大学からはこれまでに1200名以上が青年海外協力隊に参加している、日本で一番多くの協力隊員を輩出する大学です。

現在でも東京農大の卒業生は毎年20～30名が協力隊に参加しています。協力隊終了後に大学院に進学する卒業生が多くなってきたことから、東京農業大学では大学院在学中に協力隊などの海外で長期の活動をおこなうことができるプログラムを2016年から導入しました。博士前期課程の学生は在学中に協力隊に参加し、その活動内容を学位論文の内容に反映させます。協力隊参加期間中は指導教員と密に連絡を取り、指導教員のアドバイスを現地での活動に生かします。また現地での活動内容をもとに「フィールド調査」「インターンシップ」「特論演習」「特論実験」等の単位が認定されます（図）。

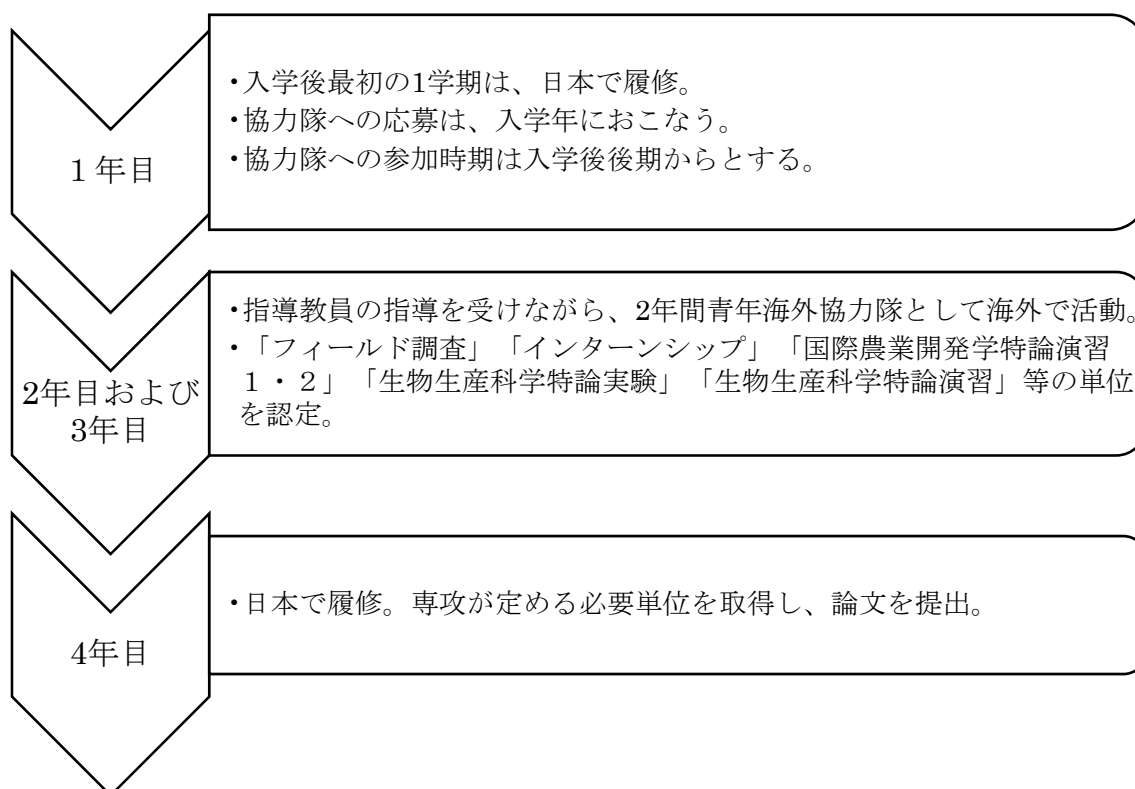


図 国際農業開発学専攻での履修計画例

選考及び派遣の流れは次のとおりです。協力隊に参加を希望する学部4年生は指導教員と協力隊の秋募集案内から派遣国と勤務先をいくつか選び、活動内容及び協力隊参加期間中の研究計画を検討し、願書を作成します。秋募集の11月に協力隊を受験すると同時に、1月に行われる大学院の受験時に協力隊への参加希望を申し出ます。受験希望者は派遣国が希望通りに選ばれない場合も想定しておきます。東京農大は大学院受験予定者のうち秋募集の協力隊受験者を協力隊事務局に推薦します。受験者が協力隊と大学院双方に合格したら、長期履修の手続きを行います。大学院に入学した大学院生は4月からの前期の科目

を履修しながら、指導教員と協力隊での活動・研究計画の詳細を詰めていきます。協力隊の訓練所への入所は入学年の10月以降になります。

この制度は現場の問題に取り組みながら研究活動を行う、オンザジョブトレーニングで、まさに実学教育です。この制度での協力隊参加者は2017年が1名、2018年が3名です。東京農大ではこれらの経験をもとに、博士後期課程への進学も促し高度人材を育成するとともに国際協力の農業専門家や国際機関で活躍する研究者が生まれることを期待しています。